

YUKIE TAKAHASHI & NOZOMI SHINOZAKI



ヴァイオリン
高橋 幸江



【協演】ピアノ
篠崎のぞみ

SINCE 1986

CITY HALL

HALL CONCERT

第296回シティホールふれあいコンサート

公募より選ばれた宇都宮ゆかりの演奏家が出演 うつのみやが創る 街と森の演奏会

2017.10.29日

宇都宮美術館 講義室 11:00開演 (10:30開場) 鑑賞無料

高橋 幸江 (たかはし ゆきえ) ヴァイオリン

栃木県栃木市に生まれ、4歳よりヴァイオリンを始める。これまでにヴァイオリンを阿久津雅志、尾花輝代充、松原勝也、井上将典各氏に、また室内楽を横山俊朗、中村静香、大谷康子、齋藤真知亜各氏に師事し、東京音楽大学卒業。学生時代において第26回栃木県学生音楽コンクール、第6回日本演奏家コンクール、第1回レガシィ・ヴァイオリンコンクールで第1位を受賞。レガシィ・ヴァイオリンコンクールでは併せてヤマハ賞、審査員特別賞を受賞。2007年東京音楽大学より奨学金を得てザルツブルグ・モーツァルテウム国際サマーアカデミーに参加、Igor Ozimiに師事。2009年フリーのヴァイオリニストとして自立し独自の芸術活動を行ってきた。2015年には自身の名刺としての精神的なアルバム「ゆきえ」を発売。現在主要な活動として、コンサートシリーズ「日本の心と魂」、リサイタルシリーズ「J.S.バッハ 大作「無伴奏ヴァイオリンの為のソナタとパルティータ」を弾く」「魂が動く」がある。また自身の心の高まりと共にその内容を演奏で表現する自由なコンサートを継続している。

篠崎のぞみ (しのざき のぞみ) ピアノ

栃木県宇都宮市に生まれ、5歳よりピアノを始める。2001年栃木県ピアノコンクール3、4年生の部最優秀賞受賞。2003年同コンクール5、6年生の部最優秀賞、及び大賞受賞。2006年栃木県ジュニアピアノコンクール中学生の部優秀賞受賞。2007~2010年ウィーン国立音楽大学、ウィーンコンセルバトリウム私立音楽大学、フライブルグ音楽大学にて年2度マスタークラスを受講。2007、2009年ドイツ・ベルリンにて独日協会主催「若手日本人ピアニストコンサート」に招待され大成功を収める。2008、2009年大阪国際ピアノコンクール 高校生の部ファイナリスト。2011年ウィーン・コンセルバトリウム私立音楽大学入学、Prof.Karl Barthに師事し、同大学ピアノ科Bachelorを優秀な成績で卒業。留学中オーストリア国内で数々のコンサートを行う。帰国後、地元宇都宮にて帰国記念ピアノリサイタルを開催し好評を博す。現在、演奏活動または作新短大の非常勤講師として後進の指導に努める。これまでに仲山英子、Prof.Karl Barth、Prof.Roland Batik、Prof.Michael Leuschner、Prof.Wolfgang Watzinger、Prof.Jan Gottlieb Jiracekに師事。

MESSAGE

皆様、この度は私達の演奏に興味をお持ち下さりどうもありがとうございます。

私達は「日本の心と魂から」と題し、

文字通り日本人の心と魂から生まれた音楽を、和魂を胸に洋の楽器にて演奏致します。

私達の故郷で生まれた音楽を囲み、一緒に和やかな時を過ごしませんか。

皆様のご来場をお待ちしております。

PROGRAM

「日本の心と魂から」

1. 春の海 (作曲 宮城道雄)

日本の音楽界を代表する箏奏者の一人、宮城道雄さん(1894~1956)は、生まれてすぐに失明され、箏演奏家として生きる道を選択されました。宮城さんは視覚以外のすべての感覚を研ぎ澄まして、世界を感じようとなされた方で、日常生活から、旅行先で感じたあらゆる感覚に至るまで、繊細に捉えて音楽になさいました。江戸時代からの伝統的な箏をどっぷりと習得された先に、当時日本に入ってきていた西洋音楽に深く親しまれ、これらを独自に織り交ぜて、異彩を放つ複雑な音色を持つ楽曲を多く作曲なさいました。

「春の海」は、昭和5年に発表された楽曲で、現代の日本でもお正月に欠かせない音楽となり、親しまれ続けています。宮城さんは「春の海」について、ご自身の随筆の中で「私が瀬戸内海を旅行した際に、瀬戸内海の島々の綺麗な感じ、それを描いたもので、ここが波の音とか、ここが鳥の声とってしまおうと面白くないが、だいたいのはどかな波の音とか、船の漕ぎこぐ音とか、また鳥の声というようなものを織り込んだ」と仰っています。原作は箏と尺八の二重奏ですが、当時、フランス人のヴァイオリニスト、ルネ・ジュメーさんがこの曲をととても気に入られ、レコードを製作し、それによってヴァイオリンでの演奏も有名になり、人々に広く愛好されるようになったという歴史があります。

2. さくらさくら (作曲者不詳)

古来、日本人は桜の花に特別な想いを寄せてきました。桜はいわば日本人の心の花です。そんな日本人独特の心情は伝統行事はもちろん文学、絵画、音楽にも連絡と受け継がれてきました。「さくら さくら やよいの空は 見わたす限り かすみか雲か 匂いぞ出ずる いざや いざや見にゆかん」の歌詞で親しまれているこの曲は、幕末のころ「咲(さい)た桜」という箏の手ほどき曲でした。明治21年に出版された「箏曲集」の中で歌詞が付けられて発表され、昭和16年には別の歌詞「さくらさくら野山も里も…」で教科書に載りました。

様々に編曲されていますが、その中でも宮城道雄さんの編曲「さくら変奏曲(箏二面と十七絃)」や、藤井凡大さん(1931~1994)の編曲「箏独奏による主題と六つの変奏「さくら」」は有名で、箏の技術の魅力を十分に味わえる作品です。この二つの「さくら」に感動した高橋幸江は、2曲を織り交ぜた上、ヴァイオリンとピアノで演奏できるように編曲を重ね、演奏しております。

※以上2曲はヴァイオリンとピアノの為の編曲版

3. 輪舌 (作曲 八橋検校)

江戸時代前期に、三味線の名手で箏曲家としても有名な、八橋検校さん(1614~1685)によって作曲されました。八橋さんは幼い頃から目が不自由で、江戸時代はこのような方々を社会的に保護するための職業安定所があり、そこから演奏家の道を歩まれることが多かったのです。八橋さんはそのような境遇から、筑紫流箏曲を法水(ほうすい)さんに学び、八橋流を創始され、今日の箏曲(俗箏)の基礎を築かれ、生田流・山田流の箏の二大流派の始祖となられました。

この曲は箏曲で「段物」と呼ばれる作品の一種です。26小節くらいのもつた旋律を「段」といい、この段の数によって「六段」「八段」などの曲名がつくのです。師匠は音楽を「コーロリン」などと口づきみながら、弟子に教えたことと想像されます。正式名称は「乱輪舌(みだれりんぜつ)」ですが、乱(みだれ)と略されることも多く、様々な技法が入り乱れ、またテンポも拍も入り乱れることから、このような名が付いたのだと考えられます。また、この曲は日本の和の世界らしい男女の性的な交わりを表現しているとも想像されます。

第296回シティホールふれあいコンサート会場・日時変更のお知らせ

①開催日: 2017年10月29日(日)

②時間: 11:00~正午(10:30開場)

③会場: 宇都宮美術館 講義室

(〒320-0004 宇都宮市長岡1077番地)

出演者: 高橋 幸江, 【協演】篠崎のぞみ

編成: ヴァイオリン・ピアノ伴奏

④会場・日時が変更になりましたので、お間違いのないようお願いいたします。

※定員 170名(先着順・全席自由)開場時、入場整理券を配布いたします。

※定員になり次第締切となります。

開演前に締切となる可能性がございます。

予めご了承ください。



交通案内

【バス・タクシーをご利用の場合】

JR宇都宮西口5番バス乗り場から関東バス「豊御台・帝京大学」経由「宇都宮美術館」行き終点下車(約25分)。
JR宇都宮駅よりタクシーをご利用の場合は(約20分)。

【自動車をご利用の場合】

東北自動車道「宇都宮インターチェンジ」から約10km、「鹿沼インターチェンジ」から約14km。

【美術館の開館時間】

午前9時30分~午後5時
(入館は午後4時30分まで)